

vol.36

宮城県内外の
生活支援コーディネーターと
協議体の取り組みを発信

大河原町で支え合いの地域づくりに20年以上取り組む、NPO法人ほっとあい副理事長の渡邊典子さん(中央)

令和3年度 宮城県生活支援コーディネーター養成研修を開催中

本年度の宮城県生活支援コーディネーター養成研修は、基本の3研修と実践の5研修で構成するオンライン方式で開催中です。

12月に開催した実践研修5<情報交換会>は、3圏域で計6回開かれ、コーディネーターや自治体職員など延べ71人の参加がありました。話題の多くはコロナの影響について。仲間と会いたいという思いを大切に、感染対策をしながらグラウンドゴルフやウォーキングなどの屋外活動に取り組む地域や、サロン参加者・気になっていた世帯への訪問活動を始めた地域、飲食なしの少人数のサロンを再開した地域、オンラインを試した地域など、工夫して楽しむ実践を相互で紹介。「地域活動を再開してよいか?」と相談を受けることが増え、先進事例を情報提供しながらどうすれば実現できるかを一緒に考えるコーディネーターの動きも紹介されました。

今後の開催予定

【実践研修2】

〈協議体運営の工夫〉

2月4日(金)10:30~16:00

【実践研修3】

〈地域資源の活かし方〉

2月10日(木)10:30~16:00

【実践研修4】

〈現状分析・住民支援の手法検討会〉

2月25日(金)10:30~16:00



12月21日情報交換会・県北会場の様子



地域で気にかけて、自分らしい暮らしの実現へ

特定非営利活動法人ほっとあい

宮城県大河原町で支え合いの地域づくりに長年取り組んできた、特定非営利活動法人ほっとあい。副理事長であり、宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡協議会会員である渡邊典子さんの実践現場をご紹介します。



副理事長の渡邊典子さん(71歳)

「支えられたり、支えたり 二度とない人生を みんな笑顔で親切に」
—これは、仲間と作詞した「ほっとあいの歌」の一節です。

特定非営利活動法人ほっとあいは、1997年9月に大河原町社会福祉協議会が主催した「在宅福祉を考える研修会」の参加者有志によって、翌年10月に発足しました。どのような状態になっても地域で暮らしたい、他人ごとじゃないよね、という思いから、多くのボランティアが運営に関わってきました。

活動の軸は、自宅に向いて話し相手や掃除などのお手伝いをする「ファミリーサポートホームヘルプサービス」と、拠点である「ほっとあいの家」でのつどい。病院や買い物に行きたいという要望に応じて外出支援移動サービスを始め、夜のケアが必要であればナイトケアにチャレンジするなど、その都度必要なサービスを生み出してきました。現在は前述に加えて、介護保険や障害者総合支援制度のサービスも実施していますが、「みんなお互いさま」の精神は変わりません。

その人が望む自分らしい暮らしへ

一つ目の柱であるファミリーサポートホームヘルプサービスは、有償の生活支援サービスです。年齢や障害の有無に関わらず、登録すれば誰でも利用ができ、利用料は30分450円。その人が望む自分らしい暮らしの実現を一番に

考えてきました。

依頼内容の上位は、通院介助、買い物、調理の下準備。あわせて、ひとり親世帯の子どもの入学式への付き添い、居酒屋や映画鑑賞、墓参りの同行、お中元・お歳暮の手配など、公的なサービスでは対象にならない希望にも応えてきました。2020年度の利用実績は25人、延べ1271.5時間。ファミリーサポートをきっかけに、必要に応じてほっとあいの家の利用や介護保険サービスなどにつながることもあります。「地域との関係を見て、つながりを切らない視点で生活を考える」(渡邊典子さん)ことを大切にしています。

二つ目の柱である、ほっとあいの家でのつどいは、月々土曜に実施。1時間200円で利用でき、現在30人が登録、1日平均15人がつどいます。同時に、誰でも参加できる「おしゃべりサロン」を月水・土曜に開催。1回200円で、13人の登録があり、5人が定期利用して



クリスマスにオカリナコンサートを開催

大野さん(95歳)

地元で小学校教諭を35年務め、顔の広い大野さん。ほっとあいの活動を見守り、有料老人ホームに入居した今も、変わらず通い続けています。「ほっとあいのよさを応援しています」。

武山さん(77歳)

総合病院でボランティア活動をしていた武山さんに、渡邊さんが声をかけ仲間に。オカリナコンサートを企画し、自ら演奏するなど大活躍。奥様お手製のおやつの差し入れも。

門間さん(93歳)

山元町出身。国鉄勤務を経て、公民館活動に従事。東日本大震災で被災し、大河原町へ避難・転居。「渡邊さんに『来週も来てくれるかな?』と言われ続けて、11年通っている」と笑います。ほっとあいの家のリーダー役。

ほっとあいの家につどう人びと

高橋さん(80歳)

シルバー人材センターに登録を断られた5年前から、ほっとあいの家のボランティアに。寄り添い上手。「自分のできることを探して動くのが好き。一人暮らしだけど、いまが幸せ」。

半澤さん(72歳)

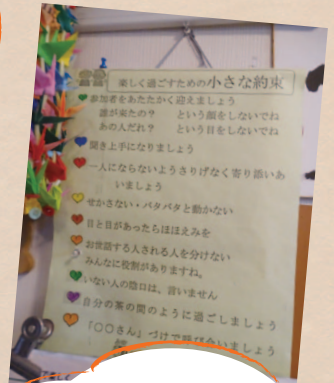
親の介護を経て、8年前からほっとあいの家の調理とファミリーサポートを担当。「片付け、掃除、調理などをお手伝いしながら、一人暮らしの90歳代の方々の暮らしぶりに学んでいます」。

菊地さん(95歳)

元保健師。要介護度3でほっとあいの家に通って6年。いまは要支援1となり、有料老人ホームから週2回参加しています。健康講話を担当。

杉山さん(77歳)

発足時からのメンバーで、岩沼市に転居したいまでも週1回事務を中心に担当。「秋に体調を崩して気力が低下したときに、仲間が励ましてくれた。形を変えて、ほっとあいとつながり続けたい」。



います。90歳代の参加が多く、要介護と要支援の方の割合は半々。障害のある60歳代の娘さんと親子で参加している家族もいます。

歌やものづくり、軽体操などを楽しみ、お昼にはボランティアによる手作りの昼食を囲みます。話をするのが得意な人は朗読や早口言葉を読み上げ、歌が始まると軽やかに踊りだす人がいて場を盛り上げます。それぞれができることを持ち寄って役割をもち、認め合う場を育んでいます。

あたたかなつながりを育てる

運営に関わるボランティアは、送迎の運転や調理など1日あたり約10人。責任のある業務を担うボランティアには、1時間400円の謝礼をお渡ししています。20年4月〜12月のボランティア数は有償が延べ720人、無償延べ280人。平均年齢は72歳。「ともに年を重ね、ここがボランティアにとっても居場所であり、お互いを気遣う場になっています」(渡邊さん)。

相互の感謝の気持ちを表す取り組みとして、「ありがとうカード」も発行しています。感謝の気持ちを伝えたいと思った人が、相手にカードを渡し、受け取った相手はまた誰かにそのカードを渡して感謝を伝えていきます。カードは法人内で金券としても使えますが、感謝の気持ちが循環し、あたたかなつながりを育てるのが目的です。カードの原資は、みんなで作成した手作り品や家庭菜園で育てた野菜などを

を販売して生み出します。

ほっとあいでは、「コロナ禍の緊急事態宣言により活動を10日間ほど2回休止した際、参加者宅に脳トレのプリントを配付して歩きました。仲間の足腰が弱っていく姿を目にし、「みんなに会いたい」という声を聞いて、感染対策をして再開し、現在に至ります。「人とながり、自分のいいところを褒められると元気になります。活動をとおして、地域で気にかけて合い、関わり合い、育ち合う関係づくりを少しでも広めたい」と渡邊さんは話します。

小

特定非営利活動法人ほっとあい

誰もが人間としての尊厳と生きる意欲を持ち続け、自立して自分らしく安心して暮らしていくことのできる地域づくりと、生きがいのある長寿社会の建設に協力することを目的に、1998年10月発足。2000年1月にNPO法人化。主な事業として、①ボランティアによる住民参加型在宅福祉サービス事業、②行政委託の一般介護予防事業および障害者等移動支援事業、③介護保険における居宅介護支援・訪問介護事業など。



宮城県柴田郡大河原町
字町279番地1
TEL 0224-52-8555

コロナ禍の地域のつながり研修会開催（美里町）〈12月3日ほか〉

美里町社会福祉協議会では、コロナ以前と変わらずにつながり合い、支え合う地域づくりを進めるため、町内16地区社協と共催し、6会場で研修会を開催。感染対策を行いながら地区社協役員等が参加されました。



講演では、仙台白百合女子大学准教授の志水田鶴子さんが登壇。人と交流をもち地域で役割をもつことは健康維持や介護予防につながるとし、町の保健師などの専門職から感染症対策を学びながら楽しみを継続しようと呼びかけました。

また、町と町社協が進める町地域福祉計画及び町地域福祉活動計画の合同策定に向けた住民アンケートの結果報告や、町社協が作成した地域のつながり事例の動画上映もありました。生活支援コーディネーターの高橋ゆかりさんは、「コロナ禍でも楽しみを共有し、つながり合うことの工夫を皆さんと一緒に考えていきたい」と述べました。

まちづくり短信

宮城県地域支え合い
生活支援推進連絡会議事務局
(宮城県社会福祉協議会)
(12月期)



地域支え合いセミナーを開催（気仙沼市）〈12月4日〉

気仙沼市社会福祉協議会は12月4日、地域支え合いセミナーを市民福祉センターやすらぎで開催。地域住民が支え合いの地域づくりについて理解を深め、住民主体の地域活動が市全域に広がることを目指して開いたもので、感染症対策として午前と午後の2部制で定員の上限を設けて実施され、89人の参加がありました。

「今、求められている地域の支え合い」をテーマに、東北子ども福祉専門学院副学院長の大坂純さんが講演。コロナの影響は多分野に及びますが、コロナ禍だから何もしないのではなく、日頃行っていることや参加している活動の効果を見直し、できることから取り組むことで、孤立を防止しつつつながりづくりになる有効性を説明。自分らしく暮らすための鍵は、「行動すること、つながりを切らないこと、気にかけて」と話しました。

続く活動発表では、地域活動2団体と地域支え合い推進員が日頃の取り組みを報告。コロナ禍であっても、自分たちのできる範囲で続けてきた活動や、どんな人も取りこぼさない

よう地域で見守りのネットワークを作り続けている活動について、発表がありました。



活動紹介コーナーを設置

お気軽に
ご相談を

事務局では、生活支援コーディネーターと協議体に取り組む地域づくりの後方支援をしています。住民、専門職、行政職向けの研修・勉強会や地域づくり実践者の事例発表・交流会などの企画、開催に必要なアドバイザーや講師の選定および招へいに向けた調整もお手伝いします。まずはお気軽にご相談ください。

電話：022-266-2621 担当：佐藤、菱沼、板橋